

「悔い改めの実」
ルカ 13：6－9

鄭 ヒムチアン

前 奏
賛 美
祈 禱
主の祈り

教会福音讃美歌 411

説 教 ルカ 13：6－9 「悔い改めの実」

13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。」

13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』

13:8 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。』

13:9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』

ある人がぶどう園にいちじくの木を植え、実りを楽しみにしていたのですが、いつになっても実らない。いくら待っても実りをつけないわけです。どれだけ待っても実りをつけないことにその木の主人はついに木を伐採するように命じます。今日読みましたたとえ話の内容です。ただしこれはたとえ話ですから、イエス様がこの話を通して何をお伝えになりたかったかを考えて見ましょう。

いちじくの木とたとえられているのは「イスラエル」、「神の民であったイスラエルの人々」です。旧約聖書の預言書ではいちじくの木が「イスラエル」を象徴するものとして何度も語られています。いちじくの木がイスラエルであるのならば、その木を植えた主人は誰でしょうか。そう、神様です。今日このたとえ話では神様がイスラエルを植えられ、心を尽くして育てられてきたということが語られています。神様はイスラエルを育み、実りをずっと心待ちにおられました。しかし、そのイスラエルに実りが一向に見られないのです。この実りとは何をあらわしているのでしょうか。このたとえ話が語られるきっかけとなった前の箇所の出発事から知ることができます。13章1節を見てみましょう。

13:1 ちょうどそのとき、人々が何人かやって来て、ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた、とイエスに報告した。

イエス様が群衆に向かって話しておられる時でした。何人かが大変だとやってきて「ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた」とイエス様に伝えたのです。これはどういうことかと言いますと、当時ユダヤの総督であったピラトの軍がガリラヤ人たちがいけにえを献げている時、つまり礼拝を献げているときに彼らを襲撃したということです。当時の礼拝においては動物をいけにえに献げていましたから、襲撃されたガリラヤ人の血が屠ったいけにえの血と混ぜたのかもしれませんが。もしくはピラトは残酷にも見せしめとして生け贄とガリラヤ人たちの血を混ぜたのかもしれませんが。とにかく1節が伝えているのはガリラヤ人たちが礼拝中に襲撃され、殺されたという恐ろしい出来事があったということです。

ガリラヤ人の悲劇のニュースを聞いた人々の心のうちに「うわあ、礼拝中に殺されるなんて、あのガリラヤ人たちはきつととても罪深い人たちだったのだ」という考えがのぼってきたことをイエス様は見抜かれたのでしょ。ですからこのように言われました

13:2 イエスは彼らに言われた。「そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだと思いませんか。」

13:3 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

13:4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いませんか。」

13:5 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

「あのガリラヤ人たちが罪深いから、神からの裁きが下ったと思っているならそれは違う」とイエス様はおっしゃいました。同時にイエス様はシロアムで起きた災害についてもお語りになります。おそらくその頃、シロアムでの塔の崩落により18人が亡くなったというニュースは人々の間で大きな話題になっていたでしょう。人々はこのシロアムでの災害のことについても「あの亡くなった18人は神の前で非常に罪深かったのだ。だから神からの罰がくだったのだ」と考え、論じあっていたようです。しかしイエス様ははっきり「そんなことはありません。」と言われました。イエス様は人々が他人の善悪について論じ合うこと、裁いている姿が我慢ならなかったのです。やめなさいと言われたのです。

毎週森の学園では水曜日の朝に聖書の授業があるのですが、その授業の最後に子どもたちがリアクションペーパー、授業の応答を書いてもらっています。いつもそのリアクションペーパーから深く教えられるのですが、先週はある子どもからこんな応答がありました。「かみさまとイエスさまがいみんなつみ人だとわかった。」子どもたちの純粋な気付きは今まで知っていたことを改めて考えさせます。神様以外はみんな罪ある存在で、そもそも罪人同士が互いの善悪を論じ合える資格はないのです。誰かの善悪について論じることができるのは唯一神様なのです。しかし、誰かの災難を知った時、誰かに押し寄せた不幸を知った時、どこかで

原因を考え、裁いている私がないか。事故や災害が聞こえて来た時、他人事として論じていないかと問われます。

誰かに押し寄せた災難や不幸について、自分は第三者の立場からあれが悪かったこれがいけなかったと論じるのはもう止めなさいとイエス様は言われます。「(5 節) わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」イエス様が私たちに伝えておられることは、まったく逆のことなのです。他の人のことではない、私たち自身のことなのです。「人のことはいい、自分はどうなのか、あなたはどうか、あなたと神様の関係はどうなっているのか。」イエス様は私たちと神様との関係改善、悔い改めを求めておられます。

イエス様は続けて今日冒頭で読みましたいちじくの木のとえ話をされます。神様がいちじくの木イスラエルを植え、大事に育ててこられた。そして実りを待っておられると語られるのです。この実りとはなんでしょうか。悔い改めの実りです。神様は忍耐しながらイスラエルの悔い改めの実りを待っておられます。しかし、待っても待っても一向に実りをつけないのです。

神様が心から待ち望み期待しておられる実りは何らかの功績をあげたり、人に評価されるようなことを成し遂げたりすることではありません。神様が喜ばれる実りは悔い改めの実、すなわち私たちの神様に対する態度の変化です。私たちが神様を自分の神、主人であると認めることなのです。しかし、私たち自身を振り返るとどうでしょうか。神様が喜ばれる悔い改めの実りに目を留めるよりは、神様こうしてください、これをください、何故与えてくださらないのですかとむしろ悔い改めの実りより自分の実りに目を留めていないでしょうか。いやむしろ自分が主人になって、神様に何で実らないんだとすら言っていないでしょうか。

いつまでも神様に対して悔い改めず、不遜な態度でいる姿に神の怒りが告げられるのです。

13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』

切り倒してしまいなさい。非常に厳しい言葉です。神様のことばに言い返すことができる人はだれもいません。しかし、今日のたとえ話はここで終わりません。園の番人が主人にお願いするのです。

13:8 『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。』

13:9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』

園の番人は誰でしょうか。そうイエス様です。神の怒りを前にして、神様の人の間にたち、私たちのことをとりなしてくださるイエス様です。「神様、どうか今年もう一年だけ待ってください。お願いします。もう一度チャンスを与えてください」と神様に懇願しておられるイエス様です。イエス様は言われます。「木の周り

を掘って、肥料をやってみます」と、イエス様は私たちが諦めておられないのです。イエス様が私たちを生かすために、私たちうちにある悔い改めを邪魔する固くなった心を掘り起こしてくださるのです。私自身このイエス様の神様へのとりなし、私自身を掘り返し、肥料をまいてくださったイエス様のお取り扱いを経験した出来事がありました。

去年5月コロナウイルスに罹った時のことです。4、5日ほど経ち、特に悪化することもなくここま回復すると思っていた時のことでした。突如高熱になり、急激に悪化して呼吸困難を起こし救急搬送されました。救急車の中で体がブルブルと震え、息苦しくなって意識が朦朧としていた時、ふとこのまま死んでしまうのではないかという思いが頭の中をよぎりました。その瞬間、反射的に涙がとめどなく溢れてきて、出てくる言葉を抑えることができませんでした。私は救急車の中で泣きながら「神様ごめんなさい。神様ごめんなさい。神様このままでは死ねません。僕の人生まだあなたにささげきっていません。」と言い続けていました。

もしこのまま死んだら、神様の御前に立つことに恐怖を覚えました。同時に、何より自分の幸せを大事に握りしめ、自分で自分の人生を支配しようとしてきた自己中心的な姿に気付かされ、愕然としました。無事に回復してこの出来事を振り返った時、この出来事を通して自分自身でも気づいていなかった神様に対する間違っただけ態度が明らかになったのだと知りました。口では「神様ともいってください」と求めながら、ある時には「神様今とはともにいないください、今は自分が主人でいたいのです」という神様に都合よく近づいては、離れるという間違っただけ態度が示されたのです。

イエス様が私の心を掘り返して下さったのだと思っています。この時出てきたものは認めたくないものでした。けれどこれは神様が私に対して抱かれていた不快感そのものであったのだと思います。何よりも感謝すべきことは切り倒さず、再度チャンスをお与えくださったことです。

この出来事を通して考えさせられていることがあります。それは悔い改めが必要な人ほど悔い改めが難しいということです。私自身がそうでした。神様に対して自分がどんな間違っただけ態度をとっていたのか、神様が私に対してどれだけ不快感を抱いておられたのかそのことに全く気づくことがなかったのです。悔い改めが必要なのに悔い改めの必要すら気づけない、実に無力な姿を痛感するのです。

そう私たちは無力なのです。だから私たちは頼らなくてはいけないのです。私たちのためにとりなしてくださっているイエス様にです。イエス様は言われます。「ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいってください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。」イエス様は私たちが諦めず、私たちの心を掘り返して耕し、肥やしを与えようとされている。私たちの固くなった心に鋤を入れてくださるのです。そのお取り扱いに素直に応答できる私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。

聖餐式

今日ともに読んだ聖書の中で園の番人であるイエス様はこう神様に願います。「**ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。**」イエス様は十字架上でご自身の命さえも私たちの実りのための肥料として注がれたのです。それだけではありません。イエス様の十字架で流された血潮により、私たちの罪を赦してくださったのです。その恵みを覚えて、ともに聖餐に与りましょう。

聖書朗読 マタイ 26：26－29

26 また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

27 また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。」

28 これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。

29 わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」

招きの言葉

主イエス・キリストを自分の救い主と信じる者はすべて、この聖餐式に招かれています。もし自分は今聖餐を受けるのにふさわしくないのではないかと、私はまずは悔い改めてから、その後に聖餐に与るべきだと思っているクリスチャンがいるでしょうか。いや、そのような人こそ、勇気をもって聖餐にあずかってください。私たちは悔い改めるにおいて無力なのです。必要なのは私の心を掘り起こし、肥料を与えられるイエス様のいのちが私たちのうちで生きることです。ですからイエス様に私たちの心を開き、喜んで聖餐を受けましょう。

まだクリスチャンで無い方には、後ほど配られる、パンとぶどう酒を遠慮していただくこととなります。ですが、これは皆さんを教会から追い出すことではありません。この儀式はまだクリスチャンで無い方々への、神様からの眼に見える招待状です。パンとぶどう酒をご覧下さい、これは、あなたのために献げられた主イエスキリストの命であり、あなたのために流された主イエスキリストの血潮です。一日でも早くこの招待状を受け取り、クリスチャンになって、一緒に聖餐にあずかる日が来ることを祈ります。

聖別の祈り

分 餐
受 餐
祈 り

賛美・席上感謝献金

教会福音讃美歌 319番

感謝祈禱

紹介と報告

頌 栄

祝 禱

後 奏

感謝の祈り Ⅰ 飯沼優役員 Ⅱ 中村充役員 Ⅲ 伊藤新役員
神学生の挨拶 ① 小尾神学生 ② 関谷神学生 ③ 福迫神学生
2023年 テーマソング